書下し長篇サイコ・スリラー

魔数字

ロス市警ホミサイド課

榊 暎一

Eiichi Sakaki

《Aberration》

TOKUMA

Eiichi Sasaki

榊 暎一

一九五七年東京生まれ。
日本大学獣医学部卒業後、
英国留学。
八年間英国に滞在したが、
放浪中に臭い飯を食ったことも…。
その後、二年間パリに滞在。
痛快なアクションはもちろん、
徹底取材でリアルさを目指す。

魔数字 ロス市警ホミサイド課

2001年8月31日　初刷

著　者　榊 暎一

発行者　松下武義

発行所　徳間書店

東京都港区東新橋1-1-16　郵便番号 105-8055

電話 (03) 3573・0111

本文印刷　三晃印刷 (株)

カバー印刷　近代美術 (株)

製本所　(株) 明泉堂

魔数字

《AberratiOn》

書下し長篇サイコ・スリラー

ロス市警ホミサイド課

榊 映一

Eiichi Sakaki

◎L.A.発、メガトン・アクション。おなじみ『はみだし刑事』vs『謎の連続殺人鬼』もの？ 答えは、イエスにしてノウ。二転三転する対決のゴールをきみは読めるか。最後に明かされる《ママ、魔数字》の真相に仰天せよ！……野崎六助（文芸評論家）

◎海外を舞台に日本人の活躍する小説は少なくない。日本社会の急激な国際化、そして、日本人野球選手のアメリカ大リーグでの大活躍などは、リアリティのうすかった海外を舞台にした小説をリアリティのあるものに変えつつある。日本人警察官の大倉竜也が活躍するハード・アクション《魔数字》もそのような小説の一つだ。ディテールがていねいに書き込まれたこの小説は、読者を違和感なく犯人を追いつめるリアルな世界に引き込んでくれる。

……床井雅美（能器評論家）

TOKUMA NOVELS

書下し長篇サイコ・スロス市警ホミサイド課

魔数字

榊 暎一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

	プロローグ	7	PROLOG
一章	魂の秤量（ひょうりょう）	10	PSYCHOSTASIA
二章	金髪の牝狐（めぎつね）	82	TRICKY VIXEN
三章	死の狩人（かりうど）	108	DEATH HUNTER
四章	闇黒（あんこく）の扉	147	GATE OF DARKNESS
五章	邪鬼（じゃき）の影	213	SHADOW OF FEAR
六章	鉄槌の引金（トリガー）	313	TRIGGER OF REVENGE
七章	暗翳（あんえい）	334	CRISIS
八章	狂気の教義（ドグマ）	390	LUNATIC DOGMA
九章	招待	413	INVITATION

登場人物

大倉（おおくら）　竜也（たつや）	警部補	三六歳
	（日本人）	
クリス・ゴードン	初級刑事	二八歳
	（アイルランド系）	
エイミー・鈴木	プロファイラー	二七歳
	（日系人三世）	
ドナ・ターナー	新前刑事	二六歳
ボブ・ケント	二級刑事	四二歳
ラデス・カルバーロ	初級刑事	二七歳
	（スペイン系）	
のろまのボビー	二級刑事	三五歳
ダン・マックウェイ	警察局長	五四歳
	（黒人）	
ジェームズ・スタック	捜査部長	
ジャック・モリス	主任検屍官	
ギル・ガセッティ	主任検事	
マック・ギャレット	主任連邦捜査官	
	（ＦＢＩ）	
ロバート・ワイズ	部長内務調査官	
ジョン・クロード	竜也の親友	三六歳
	（黒人マフィアのボス）	
サンドラ・コットン	女医で竜也の元妻	
マリー・ゴードン	クリスの妻	
バート・シモンズ	犯罪心理学教授	
	（カリフォルニア大学）	
クレア・シモンズ	教授の娘	二五歳
アレックス・ボーン	大学院の学生	二六歳
	（クレアの婚約者）	
ブライアン・フォーク	牧場の養子	
ホセ	殺し屋	

プロローグ　PROLOG

突然、身の毛がよだつような鈍い音が静寂な書斎に響く。不意に一撃をくらった父が顔面をゆがめ、ヒィーッとかぼそい息を呑み込んだ。恐る恐るふり返るやいなや虚空へ突きあげられたバットが再び唸り、一気にふり下ろされた。老眼鏡はふっ飛び、椅子ごと崩れ落ちると、悶えながら手足を痙攣させて白眼を剥き出していた。乱れた銀髪は真赤に染まり、そこから流れ出る血があたかも自由になった生き物のように、ゆっくりと床をはって逃げてゆく。

おおいかかる金髪から覗く無垢なブルーの双眸と、あどけない顔にべっとり塗った真赤な口紅が妖気を発していた。

不釣合いなスカートを身につけ、か細い手に握られたバットには血塊と毛がこびりついている。

異変に気づき、エプロンをつけた母が慌ててキッチンから飛びこんできた。

「どうしたの！　そんな格好で……」

血も凍るような光景を目にし、金切り声をあげ、床の夫を胸に抱きかかえる。

天使のような童顔がぶきみに微笑むと、後ろ手に

隠し持ったバットで母の頭を滅多打ちにした。裂帛の叫びも消え、血腥い臭いが充満してくる。

無惨な姿でおり重なり、悶絶した父母を別々に地下室のその下にある仄暗い部屋へひきずり込むと、壁面の二つの十字架にロープでしっかりと括った。

父母の口は粘着テープでふさがれ、首筋にはよだれが糸をひいていた。朦朧としている父の手首に、クサビをハンマーでガッンと打ち込むと、打傷から血がとび散った。

全身に激痛が走ったのか弱々しく呻く。もう片方の手首にも容赦なくクサビが打ち込まれると、目覚め、血走った目をカッと見開いた。ふさがれた口から何やら叫んでいたが、言葉にはなっていなかった。

もがく二本の足首にガッンとクサビが打ち込まれると、父は悲鳴のような鼻息を洩らした。失禁した小水が脚を伝わり、足首の生血を洗い流し、床を真赤に汚してゆく。

十字架の母はうなだれてぐったりとしていた。が、手首にクサビが打ち込まれると、ふり上げられたハンマーを見て、狂ったように身をよじる。ふさがれた口から洩れるのは断末魔の虚しい絶叫だった。

懸命に首を左右にふり、十字架に張り付けになった夫を横目で見ながら血涙を零していたが、もう一方の手首にクサビが打ち込まれると底知れぬ恐怖の中で絶命した。

しばらくの間、小首を傾げ、十字架の父母を見つめていたが、スカートをひきずって地下室から出ると、分厚い木製のドアを閉鎖し、軋む階段をのぼりキッチンへむかった。

食卓には手作りの誕生日ケーキがあり、十七本のローソクの炎がゆれていた。独りで夕食前の祈りをささげ、牛肉とビーンズの煮込み、マッシュ・ポテト、硬い黒パンをつつましく食む。食事を終えると、いつものように使った食器を洗い、自分の部屋へもどっていった。

異常乾燥が続いた九月、納屋の屋根に取り付けら

れた風車が乾いた砂漠の風を受け、カラカラと音をたて回転している。
窓枠に納まった遠くの連峰の余光が闇に溶けこんでゆく。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一章　魂の秤量　PSYCHOSTASIA

1

極彩色のステンド・グラスにはめ込まれたイエス・キリストが西海岸の曙光をあび、静寂で薄暗い教会内にくっきりと浮かぶ。それは闇黒で彷徨する人々に光明を与えているかのようだ。真下の祭壇には人類の犯したスィン（罪）を背負った十字架のイエス・キリスト像が祀られている。そのイエス・キリスト像の首が外され、代わりに無惨な生首が怨めしそうにのっていた。

「QUÉ（ケ） PASA（パサ）！（何てことを！）」

思わず息をのみ、スペイン語を口にした小太りのヨセフ神父が、手を小刻みに慄わせながら口もとで小さく十字をきる。早朝ミサの準備前に、お祈りを捧げようとした神父の目におぞましい光景が焼きついた。

けたたましいサイレンを轟かせ、点滅灯を回転させた数台のパトロール・カーが、オルヴェラ街から北に位置するヒスパニック系旧教会の玄関先に突っ込むようにとまった。

旧教会の入口はすでに立入禁止の黄色いテープが物々しくはられ、分署の警察官たちが忙しそうに現場の警備に追われている。

早朝にもかかわらず、野次馬が遠巻きに見つめ、

あたり一帯が祭りのように喧騒としてきた。
この街はロス市警から目と鼻の先で、ロサンゼルスの発祥の地として夙に知られている。ここは街というよりもストリートで観光旅行者むけのおみやげ屋が軒を連ねているところだ。

フォード九九年型の真赤なムスタングがタイヤを軋ませて止まった。
運転席のドアが開き、レイバンのシューティング・サングラスをかけ、背丈六・二フィート（百八十九センチ）で野性的な風貌の大倉竜也警部補がさっそうと降りたった。
助手席からは五・八フィート（百七十七センチ）でハンサムな相棒の初級刑事クリス・ゴードンがいやに眠そうな面で現れた。
さっそく、竜也とクリスが教会へ近づくと顔見知りの巡査が気軽に声をかける。
「ヘイ！　マッド・ドラゴン、あんたが来るとは思わなかったぜ」
「俺が好きこのんで来たわけじゃねえ。ドブス巡査、相変らずブタみたいに肥やがって、おまえもお払い箱だな」
竜也はドラム缶のようにつきでた腹を軽く小突くと、立入禁止の黄色いテープを慣れた手つきで押し上げてくぐり抜けた。
旧教会の玄関へむかう竜也の耳に、ドブス巡査の脇にいた若い警察官のささやく声が聞こえてきた。
「奴がロス市警のマッド・ドラゴンか……図体はかなりデカイが、ただのジャップじゃねえか」
「そうかな、ロスのチンピラは絶対に銃はむけねえよ。昔、奴を弾いた男がいたが、一時間もたたないうちに、その野郎は砂漠に埋まっていたというウワサだ。奴が怒ったら最後、とことん追いつめ、鋭い爪でズタズタに切り裂き、心臓をえぐり出すらしいぜ」
ドブス巡査が薄笑いをうかべて呟くと、若い警察

官は惰弱なのか無意識に心臓の辺りを押さえて顔をしかめる。竜也はふり返ることもなく、するりと聞きながしていた。

教会の玄関に一歩足を踏み入れる。床に敷かれた黒大理石が人々の往来でかなりすり減っていた。この教会の長い歴史を物語っているようだった。吹き抜けの天井を仰ぐと華美な彫刻が施され、周囲を天使たちが舞っている。内部の温度はひんやりとし心持ち肌寒く感じた。祭壇の周りでは、四名の科学捜査班と、一名の専属カメラマンが仏頂面であわただしくうごめいている。

小太りのヨセフ神父が、入ってきた竜也に気づくと、目ん玉を白黒させてぶっ壊れたラジオのようにスペイン語でまくしたてた。

どうやら、神への冒瀆だとひどく怒っているようすだった。

「UNA MOMENTO！（ちょっと、待った！）」

竜也は片言のスペイン語で話をさえぎるとクリスへ顔をむけ、かまびすしい神父の相手をするようにアゴでうながす。

「竜也、俺だってわからないぜ……」

クリスが困惑の表情を露骨にみせたが、竜也はいっこうに気に留めることもなく、祭壇に近づくと、捜査班の連中にそっけない挨拶をした。

現場検証の説明を受けながら、生首を見あげた。首の切断面はパラフィンのような物質で覆われ、血液は一滴もたれていない。

生首の頭髪は乱れもなく、一見マネキンの首のようにみえる。

それがかえって底知れぬ不気味さを増長させていた。薄暗い雰囲気のせいも多分にあるが、惨殺された男からの怨念がひしひしと伝わって来るようだった。

「竜也、瞼を開けてみろ」

蝶ネクタイをつけたキザな主任検屍官のジャック・モリスが示唆する。竜也はラテックス製の薄い

手袋をポケットからとり出して素早く両手にはめると、生首の瞼をあけてみた。次の瞬間、「ウッ」と目をそむけた。

眼球がカミソリのような鋭利な刃物で、十字に切り裂かれ、うっすらと血が滲(にじ)み出てきていた。

「……ひでえことをしやがる。ジャック、ガイ者の死亡推定時刻は？」

「正確にはわからんな。首の組織の腐敗はまだ始まっていないが、おそらく首を大事に冷蔵庫で保存していたのだろう」

相棒のクリスが背後から近づき、生首の眼球を見て息をのんだ。

「食いつきゃしねえよ」

竜也はクリスを一瞥(いちべつ)すると生首の口をむりやりにこじ開けてみた。

小さく折り曲げられた紙切れが覗く。取り出して開いてみると、508―22・07と数字が記されていた。

「その数字は？」

クリスが首を突っこんで訊(き)き、思案顔の竜也を見上げた。

「わかんねえな……ホシはサイコ映画の見過ぎじゃねえのか。謎めいたくだらねえメッセージを残しやがって、自己紹介でも書いてあれば、少しはほめてやるのによ。

クリス、ヨセフ神父から、何か聞きだしたか？」

怒りが収まらぬようすで訊いた。

「朝、神父がお祈りをあげようと、祭壇に近づいて初めて気がついたそうだ。昨夜の九時頃までは何も異常はなかったといってるが……」

「犯人が首を持ち込んだ時間帯は、午後九時から明け方の間ということか……」

独言のように呟きながら、キリスト像の周りをたんねんに調べ始めた。が、急に何かを思いついたように身を起こした。

「クリス、俺の車に使い捨てカメラがあっただろう。

群がる野次馬を気づかれないように写してくれ」
「SURE（シュアー）（わかった）」
クリスは竜也から受け取った車のキーをポケットに入れ、急いで教会をあとにした。
竜也は引き続き内部の捜索を始める。その後、スペイン語を喋る警察官を通してヨセフ神父に夜間の戸締りなどの尋問をした。
しばらくすると、クリスが写真をとり終えて外から戻ってきた。
「これでいったん、ロス市警（LAPD）に戻って報告書を書き、午後から付近一帯の聞き込み捜査を始めるか。後はよろしく」
主任検屍官のジャックの肩に手を触れ、後の処理を頼むと踵（きびす）を返して出口へむかった。クリスが続いて外にでると、陰惨な事件とはうらはらに、雨の少ない西海岸の太陽が眩（まぶ）しいほどギラついている。
ロサンゼルス、人口三百六十万、全米第二の都市。ロス市と周辺の四群が都市圏を形成し、その面積は北海道よりも広い。ここは百四十ヶ国の多民族が入り混じった人種のるつぼといえる。それゆえに、凶悪犯罪が後を絶たない。ロスは観光地だが裏の顔は殺人事件が多発する危険都市でもある。

ウエスタン・ブーツにジーンズ姿の三六歳の竜也とブルーのスーツを着こなした二八歳の相棒のクリスが六〇〇〇CCの特別なエンジンを搭載した真赤なムスタングに乗り込む。運転席の竜也はオート・ギヤ・レバーをドライブに入れ、アクセルを一気に踏み込んで急発進させた。相棒のクリスが車の背もたれに首をぶつけると叫んだ。
「TAKE IT EASY（テイク イット イーズィ）！（落ち着けよ！）」
乱暴に車を発進させた竜也の渋い横顔を見る。事件の始まりはいつも不機嫌になる竜也だが、運転を見るかぎり、今回はその度合をはるかにこえているようだった。
（首を刎（は）ね、切断面をたんねんに処理する偏執的な

殺人……病的な潔癖性か、そんな光景を考えただけでもゾッとするが。被害者の顔を潰していないということは、どういうことか？　ホシはよほどのバカか……それとも何かの見せしめなのか？）

しかめっ面で得体の知れない殺人鬼の心の闇をさぐっていった。

「竜也、それにしても、朝っぱらから胸糞悪い事件だな」

クリスが欠伸をこらえるように手を口もとにあてながら竜也の精悍な横顔をみる。

「これで、俺のせっかくの休暇もパアだな。クリス、昨夜遅くハワイから戻ったんだろう。常夏のハネムーンはどうだった」

「初日はよかったが、それから後は女房面でああしろこうしろと何でも命令しやがってさあ、結婚は人生の墓場とはよくいったもんだぜ、この先が思いやられるよ」

クリスの満更でもない惚気話を、離婚している竜也は笑いながら聞いていた。

「クリス、どうでもいいけれど、そのドン臭いネクタイ、おまえにピッタリだな」

「しょうがねえよ、ハワイで買ったマリーのお気に入りだから……」

クリスも竜也にいわれて気になるのかバック・ミラーを覗きながら眉をひそめる。彼はロス市警随一の色男だ。

仕事はそこそこだがロスの娼婦からもハニーと呼ばれ、すこぶる人気がある。

ロス市警（LAPD）に戻る途中で、北に位置するグレンデール・フリーウエイ近くのロサンゼルス川に、変死体があがったと本部から無線が入ってきた。

「首のない土左衛門だ、事件と関係があるかもしれないな……」

ムスタングが路線を変えてパサディナ・フリーウエイに入った。カリフォルニアの東西を走るハイウエイのナンバーは偶数であり、南北が奇数になって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com